

はじめに



日本においては生活環境の著しい改善により、平均寿命は現在世界のトップにあります。現在ではただ長生きするだけでなく、QOL (Quality of Life) の高い生活が望まれるようになりました。人々の生活の中で食事を不自由なくできることは、高齢化社会を迎える上でQOLの高い生活を支えるために重要です。歯科保健の分野ではハチマルニイマル 8020運動(80歳で20本以上の自分の歯を残す)を提唱しています。現状では60歳で残存歯は20本、80歳で10本であり、寿命と口の中の状態には隔たりがあります。

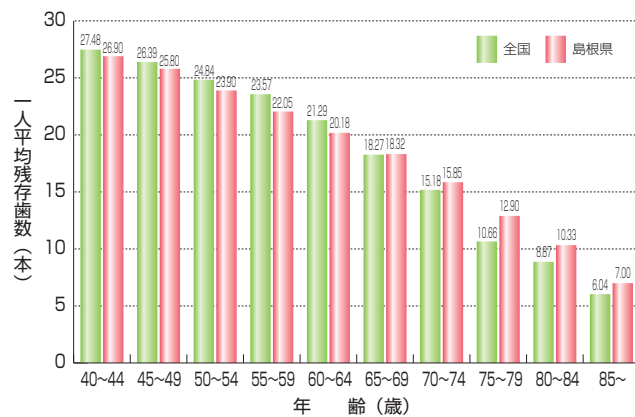
この冊子が、働きざかりの大切な歯を失わないために、成人期から壮年期にかけての職場における歯科保健対策の一助となれば幸いです。

島根県歯科医師会・島根県では、島根県民の口腔の状態を把握するために、平成10年度に「抜歯の原因調査」の実施、また、自分の歯が何本残っているのかという「残存歯数調査」を平成13年度及び平成17年に行いました。

平成17年全国歯科疾患実態調査と島根県との比較

年代別一人平均残存歯数

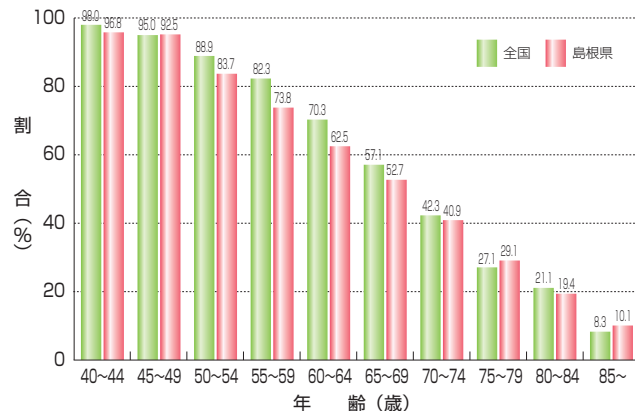
全国と比較すると、40歳～64歳で島根県は下回っている状況です。年齢が上がるにつれ、残存歯数は減少しています。とくに45歳以上で歯数の減少が強くなり、5歳ごとに平均2～3本の減少が認められます。



20歯以上有する者の割合

島根県では、ほとんどの年代において全国平均より少なく、特に50歳～69歳の年代では顕著となっています。

壮年期の残存歯数を増加させるという課題が考えられます。



調査対象者

調査人数 ● 34,910名

対象年齢 ● 40歳以上

(平成17年県民残存歯調査報告書より)